

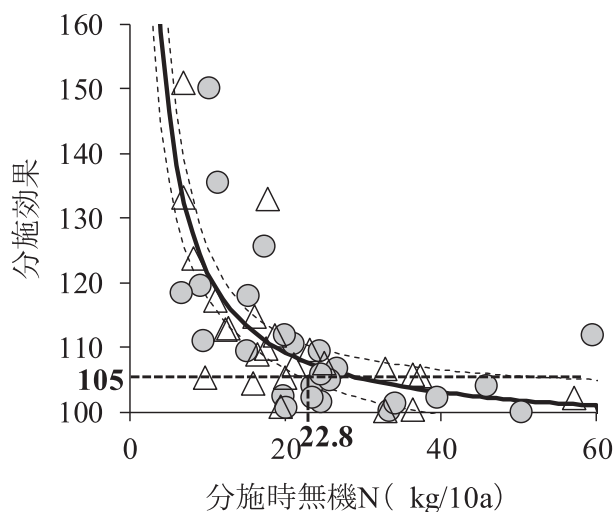


図1 分施時無機態窒素量と分施効果の関係

●, 根釧 (n=25); △, オホーツク (n=24)。2017～2019年のデータ。分施効果は、各事例のN用量試験における分施N無施用区に対する最大収量区の乾物収量比。分施時無機態N量は、分施直前の株間土壌(0～40cm)から計算。基肥窒素量は8～10kg/10a。

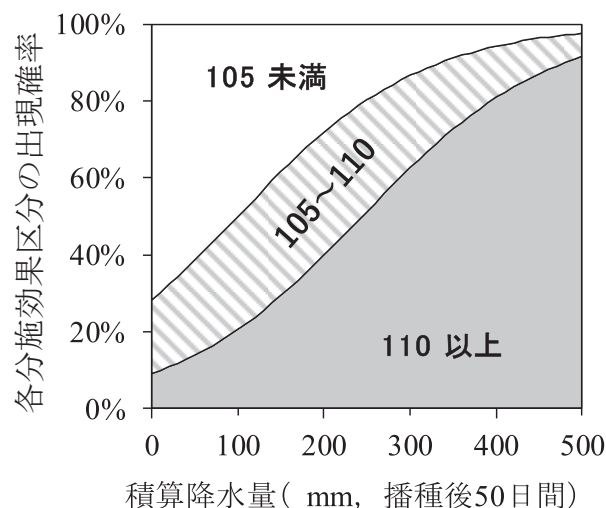


図2 播種後50日間の積算降水量と各分施効果区分の出現確率の関係

分施効果を105未満 (n=27)、105以上110未満 (n=20) および110以上 (n=27) に3区分 (順序尺度) し、ロジスティック回帰を行った ($p < 0.01$)。

各分施効果区分の出現確率は、当該降水量で発生する確率を積み上げ値として示した。

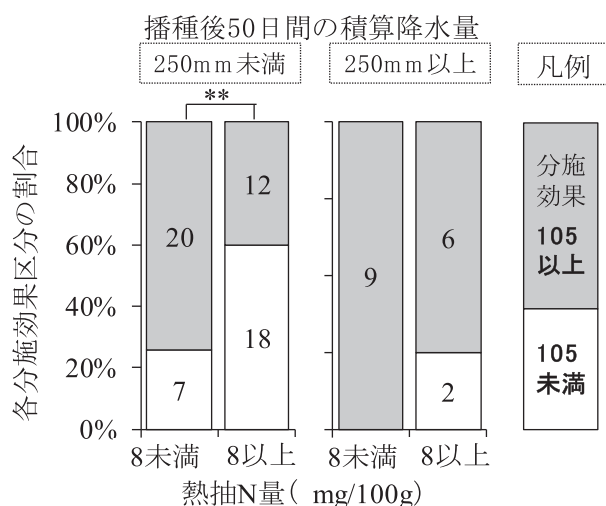


図3 降水量と熱水抽出性窒素含量で場合分けした分施効果区分の事例割合

棒グラフ中の数値は、各分施効果区分の事例数。**, $p < 0.01$ (Fisherの正確検定)。分施N無施用区のない1事例を除いて解析。熱抽Nおよび降水量の四分位範囲は、6.6～10.1mg/100gおよび88～243mm。

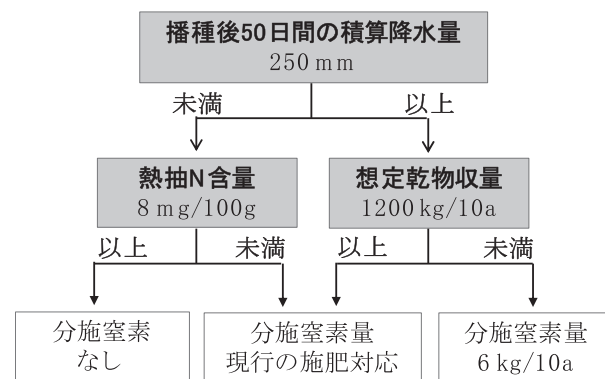


図4 降水量と熱水抽出性窒素含量および想定乾物収量に基づく分施窒素の施肥対応

熱抽Nは播種前の値。想定乾物収量は、根釧地域の降水量250mm以上の条件に限り次式で計算。生育初期の日平均気温の積算値 ($T, ^\circ\text{C}$)、播種日 ($S, 4/1$ を「1」とする連続日)を説明変数とし、 $10.5 \times T - 52.7 \times S - 2990$ ($p < 0.01$)。

現行の施肥対応は「土壌診断による飼料用とうもろこしの窒素施肥対応」(平成29年普及推進事項)を参照。

詳しい内容については、次にお問い合わせ下さい。
道総研酪農試験場 草地研究部 飼料環境グループ 八木 哲生
電話 (0153) 72-2004 FAX (0153) 73-5329
E-mail yagi-tetuo@hro.or.jp